

隅田川流域における河川利用の変容とその要因に関する研究 Study on transformation and factors of river use in Sumida River basin

○新井侑子¹, 菅原遼², 畔柳昭雄²

*Yuko Arai¹, Ryo Sugahara², Akio Kuroyanagi²

Abstract: This paper focuses on the water culture that has been developed and declined in the Sumida River, and captures the process of the rise and fall according to the spatial transformation of the Sumida River and its factors. As a result, it became clear that the water culture diversified with the frequency of river use, but today the effect of enjoying from the waterside is decreasing.

1. はじめに

江戸期の河川・運河は、物流の要であり、人々は水辺に係わることで特有の水文化^[1]を生み出してきた。特に隅田川では、商いや遊覧等の多様な水辺利用がなされてきた。その後、隅田川で培われた水文化は、都市化の進展に伴う河川敷の空間整備や背後地域の変容と相まって盛衰を辿ってきた。

そこで本稿では、隅田川流域において発展・衰退がなされてきた水文化に着目し、隅田川の空間変容に応じた盛衰の過程とその要因を捉えることを目的とする。

2. 調査方法

江戸期以降の隅田川を対象に、河川整備および河川利用の変遷を把握した。具体的な把握に向け、隅田川に接する東京都7区（北区・足立区・荒川区・台東区・墨田区・中央区・江東区）にて編纂された文献の他、隅田川を題材とした絵図等を用いた。抽出した河川利用については、利用目的に基づき分類を行なった。

3. 隅田川の河川整備および河川利用の変遷

3-1. 江戸期における河川利用の特徴

Fig.1に江戸期の都市整備と水利用の変化を示す。隅田川は天下普請に加え、東遷事業（1594-1654）や荒川放水路開削（1913-1930）に伴い周囲の市街化が進んだ。明暦の大火（1657）以降、隅田川東部は大名屋敷や社

寺仏閣が集積し、沿川部には河岸や御倉が分布した。両国橋付近は、火除け地が設けられ茶店や寄席の小屋が並び行楽の名所となった。上流には田園風景が広がり、沿川の木母寺や百花園などの自然名所が点在した。

都市機能に加え遊覧の空間が形成されたことで、河川利用は多様な水文化の形式に繋がった。これらは漁撈、舟運、遊戯、祭事、商業と多岐にわたった。漁撈は江戸成立以前から行われ、下流域を中心に漁業と遊び漁の釣りに派生した。舟運は、河岸地へと運搬する舟運船と交通手段である渡し等の各種舟に大別される。交通に用いる舟には、花街や名所と連携し独自の運営形態を持つものもみられた。遊戯は、舟遊びや墨堤での花見が挙げられる。舟遊びは、料亭や名所と関連するものもみられた。舟遊びは江戸行事の際に多用され、屋形船や屋根船を中心に船遊山として用いられた。祭事の多くは江戸成立以前から継続しており、両国川開きや蔵前・鳥越神社による水上祭、流し雛等が挙げられる。商業は、風呂を運ぶ湯船や水を売る水舟、舟遊びの人々に物を売る茶船、河川沿いに立地し各種舟を停泊させる船宿での舟運や貸付が挙げられる。

3-2. 明治期以降における河川利用の特徴

明治期以降に発展した隅田川の河川利用として、舟運では蒸気船があり、隅田川大洪水の際の臨時渡船を機に永代橋-吾妻橋間の運航が開始され、交通や観光手段として親しまれた。遊戯では、1905年に両国橋-白

| | 江戸および隅田川の整備事業 | 都市空間の変化 | | 河川利用の変化 |
|--------------|---|--|--|--|
| | | 上流域 | 下流域 | |
| 江戸前期 1590 | <ul style="list-style-type: none"> ・堀川康江戸入り ・第一次天下普請 (1606) ・第二次天下普請 (1613) ・第三次天下普請 (1620) ・第四次天下普請 (1628) ・第五次天下普請 (1636) | <ul style="list-style-type: none"> ・日本橋、深川一帯の埋め立て ・利根川の東遷事業 | <ul style="list-style-type: none"> ・江戸前島の埋め立て | <ul style="list-style-type: none"> → 河港および海港の分化 ・大屋形船の発展 ↓ ・舟遊びの庶民化、巨大化 ・火除け地の設置により、沿川に店舗が立地 ・河川利用した祭事の開催 ・屋形船が衰退し、小型化が進行 ・文人墨客から河川が名所として認識される |
| 江戸後期 1657 | <ul style="list-style-type: none"> ・明暦の大火 ・利根川・荒川決壊 (1704) ・関東路河川普請 (1794-) | <ul style="list-style-type: none"> ・佃島の埋め立て (1645) ・寺院の移転により行楽地が分布 ・武家屋敷の移転 ・墨堤に桜が植樹され、沿川が観光地化 田園風景が広がり、各名所を結ぶ舟運や景観を活かした料亭などが集積 | <ul style="list-style-type: none"> ・江戸深川漁師町の成立 (1629) ・深川海辺大工町、奥川船問屋組合設立を許可 (1637) ・寺院の移転により行楽地が分布 ・江東地区の市街地化 庶民を中心とした舟遊びや、四季行事の派生 火除け地や寺社が大商業地となる | |
| 1868 | | | | |

Figure1. Changes in urban development and water use during the Edo period

1 : 日本大学・大学院・海建 2 : 日本大学・教員・海建

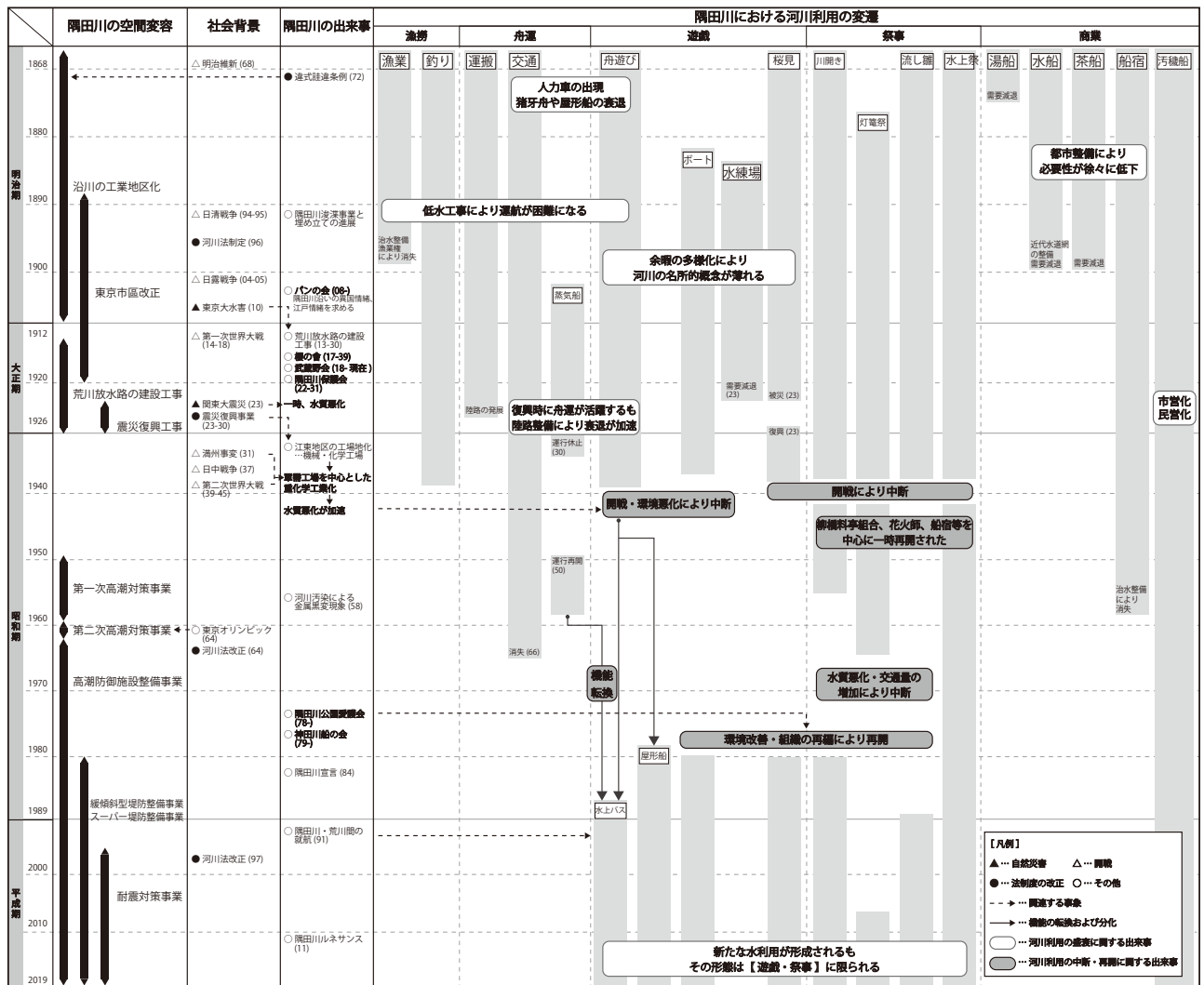


Figure2. Transition of Sumida River River Development and Waterside Use

髭橋間で開催されたボートレースや、薬研堀南に設置された水練場が挙げられる。

3-3. 明治期以降の河川利用の変化とその要因

Fig.2 に明治期以降の河川整備および河川利用の変遷を示す。抽出した河川利用について、衰退・消失の要因として、①水辺環境の悪化、②需要の減退、③余暇の多様化に大別でき、一時中断の要因として、①水辺環境の悪化、④開戦に大別できた。①水辺環境の悪化では、明治期の低水工事に伴う航行制限や、明治期から昭和初期における河岸地の官有地化、河川沿いの工場立地や昭和期の高潮防潮堤整備による水辺へのアクセスの減少等がある。沿川の工場立地に伴う水質悪化は、遊戯や祭事の継続にも影響を及ぼし、昭和後期の川開きの中断にも繋がった。②需要の減退では、モータリゼーションの発達に伴う交通手段の変化により舟運・商業の衰退が起きた。近年は、舟運は観光事業へと発展することで屋形船や観光船として親しまれている。③余暇の多様化では、近代化に伴う市民の余暇

活動の多様化により、隅田川沿いの名所の位置付けの認識が薄まった。④開戦は、昭和初期における隅田川の河川利用に影響を及ぼし、遊戯・祭事の中断に繋がった。その後、終戦を迎えると柳橋料亭組合等の各種組織体の連携により一時的に河川利用が再開された。

4. おわりに

本稿では、江戸期以降の隅田川の河川整備およびその動向を整理した。隅田川の河川利用は漁業、舟運、遊戯、祭事、商業を抽出でき、それらの変容過程から、河川利用の衰退・消失の要因および河川利用の中断の要因が整理できた。以上より、かつての隅田川沿川の空間は親水性が高く、独自の水文化へと発展した。しかしその多様さは、都市化に伴う空間変化により衰退しており、河川と市民生活の大きな乖離がみられる。

5. 参考文献

[1]三和総合研究所：「日本の水文化」, pp. 51, 2001